

甲南大学 総合研究所所報

甲南大学総合研究所

神戸市東灘区岡本8-9-1

電話(078)431-4341

第10回公開講演会 「現代経済の金融的側面」

講師 日本経済研究センター理事長 香西 泰

総合研究所は1989年10月27日午後3時から10号館1階1012号講義室で香西泰氏を招き、第10回公開講演会を開催した。同氏は、新制甲南高校第1回卒業生で、東京大学経済学部卒業後、経済企画庁、同経済研究所、東京工大教授を経て1987年より現職にあり、「現代金融の動態」(東大出版会)「高度成長の時代」(日本評論社)、『The Contemporary Japanese Economy』(Macmillan)など多数の著書がある。講演は、世界経済の安定に大きな役割を果たしている日本の金融力が、高い株価と地価に根をおいていること、ソ連・東欧の変革、東西ドイツの統一がEC通貨統合、国際通貨制度に大きな影響を与えることなど、きわめて示唆に富む内容であった。以下はその要旨である。



講演要旨

現代経済の大きな特徴は、日本といわず世界といわず、大量のお金が動き、しかもその値動きが大へん激しいことである。その理由としては金融の自由化、国際化の進展、財政や国際収支のインバランス、金融面の技術革新などがあげられる。金融の技術革新などについていえば、アメリカで1970年代にMM、MFというような新しい金融資産がつかられ、従来の貯蓄と通貨との区別がうすれ、預金金利も変動せざるをえないようになった。金融資産の価格が変動し、それがついに個人の貯蓄、預金、定期預金にまで及びつつあるのが現代経済である。

金融資産の流れが大きくなり、その価格の変動の

波が非常に荒いというのは、社会の豊かさの象徴であるとも考えられる。例えば、貯蓄の動機として最近では流動性・安全性よりも収益性を考える人が多くなっている。物の豊かさがお金の流れの大きさ激しさと裏腹の関係になっている。そこで、われわれが食事をしたり衣服を着たりする基本的な物の経済とかなり遠いところで株が上ったとか為替が下がったとかいうお金の経済があるのだが、前者の実体経済にたいして後者のお金の経済が非常に肥大しているという状態をどう考えるかというのが現代経済の大きな問題である。ドラッカーも物の経済と関係なしにお金の経済がどんどん大きくなっているのが現代の特徴だといっているが、この2つがいつまでも離れたきりでいられるのか、ということそれは疑問である。

例えば日本の地価や株価が上がった理由のひとつとして円高で金利が低下したことがあげられる。金利の低下が資産価格を上げている。また資産価格が上がったことが消費に影響を及ぼしている。こういうふうにと金と物とは全く切りはなされてはいない。物の豊かさと微妙につながってお金のストックがやたらに大きくなり、その価格が激しく変動しているのである。

しかし金融の激しい変動が物の経済に対してプラ

スに働いているのだろうかという疑問がでてくる。アメリカにおいて、現在長期の景気上昇がみられる。その理由を説明するひとつの仮説が、変動相場制あるいは資本市場の国際化による資本の国際移動である。以前には国際収支が赤字になると金利を上げ景気上昇がストップしたが、現在では、ほっておいても金が流れてきたり為替が下落したりしてバランスが維持され、赤字のままで景気拡大が続いているというのである。また、もうひとつの見方として、金融市場が自由化されているので、インフレになるという予想があるとそれを先取りした形で金利が上り、不況になるという予想があると金利が下り、結局インフレも不況も来させなくしてくれるので好況が続くという説がある。かつては、ケインズ経済学に従って政府が微調整をおこなっているから景気循環が消滅したといわれたが、現在は市場が自然に変動して人々の予想の裏をかくよう行動するから、インフレや不況がなくなったといわれている。つまり金融市場での変動が激しいことが実物経済の安定をもたらしているといわれている。だがこれが本当かという大いに疑問の余地がある。

1929年のアメリカでは、株価の大暴落がその後の大きな不況のきっかけとなったことはまちがいない、それは金融の不安定が実物経済の不安定をもたらした大きな歴史的事例である。そこで現在アメリカや世界の人びとが心配しているのは、非常に大きな力をもつ日本の金融機関の役割である。日本の金融機関が高い評価をうけているのは、含み資産一株・土地をもっているからであり、その株・土地が高いからである。日本の高い株価や地価が日本の金融パワーの根っこにあり、それが債務危機の爆発を防ぎ世界経済の回転を支えている。こういう関係が破綻なく続くかどうか、現代経済の大きな問題である。これまで大きな資金の流れと価格の変動が景気の延命に役立ってきたが、いつまでもそうなのか、どういうことになったら破綻するのか、それを防ぐ

きな問題で、金融の不安定性と実物経済の安定性が両立する条件を検討することが重要である。

さらにいえば、アメリカにおいて金融市場の自動調節機能によって実体経済が安定しているというさきあげた説に対して、そうではなくて連邦準備制度の金融政策、金融操作が景気を維持してきたのだという議論がある。この議論に対しては、金融政策というものが今日の大きな資金の流れと激しい金融資産の価格変動のなかでどこまで有効性をもつか、という疑問がある。ここではいわゆるヴァーチャリストとホリゾンタリストの論争があり、金融はかつては中央銀行から末端まで縦に流れたが、現在では多様な通貨類似金融資産が存在し横の競争関係の方が重要であり、金融を決めるのは市場の流れである、といわれている。また金融政策によって景気が維持されてきたのであれば、将来それが失敗する可能性があることになる。金融政策だけで不況とインフレを避けようとすれば、1960年代の経験がくり返され、スタグフレーションをもたらす可能性もある。

私自身の意見をきかれれば、アメリカの景気は、金融面での不安定性が続くが、実体経済にはその影響が及ばないという構造がもうしばらく維持されるとみている。しかし大量のお金の流れと激しい価格変動が、将来も実体経済に安定的影響をもち続けるのかどうか、またそういう状態のなかで金融政策がどの程度力をもつか、という点は、今後の大きな検討課題であると思われる。

最後に国際通貨問題のテストケースとしてのEC通貨統合についていえば、ゴルバチョフ革命と東欧社会主義解体の結果ナショナリズムが復活し、東西ドイツが統一されることになれば、EC通貨統合あるいは世界全体の金融組織に大きな影響が出る。物と金、国家と金との関係が、一方でグローバル化が進み他方でナショナリズムが復活する世界のなかで、どういう姿をとっていくかが、今後の経済をうらなう重要なポイントになるのではないかと。

平成元年度共同研究中間報告

アメリカの社会と文化：

移民社会ハワイの構造分析

日本とアメリカの接点でありながら、従来「アメリカ研究」の対象としては、とりあげられることの少なかったのが「ハワイ」である。今回、この「ハ

ワイ」を学際的に、多面的に分析しようというのが、研究の基本的視点であった。

一年目は、分析のまえになされるべき「ハワイ」についての学習に重点がおかれ、数回の研究会と甲南＝イリノイセンター所長の、チャン・ビョンホー

氏および本学客員教授＝イリノイ大学教授のチェコ・ムルハーン氏を招いての勉強会をおこなった。

それぞれの研究の中間的成果と、残された課題については、以下の各分担者の報告に示されているが、非常に研究量の少ないところを、専門の異なる5人が、はじめて分析しようとするところから、研究状況は、「とまどいながら進行しつつある」というのが正直なところである。研究の総仕上げには、現地調査や現地研究者との交流を考えている。

「アメリカの社会と文化－移民社会ハワイの構造分析－」

久 武 哲 也 (文学部)

1989年4月に、統計資料や地図その他のハワイ諸島に関する資料をもとに、ハワイ諸島の島嶼ごとの人種(Ethnic Group)構成とその変化を、歴史的な土地所有、産業構造、移民の推移過程と関連づけて、「移民社会分析の手がかり」として口頭発表した。1989年10月には、約10日間、ハワイのオアフ島を中心に現地調査を行なう一方、ハワイ大学の図書館でHawaii Statistical Reportsの人口・移民統計や地図その他の史資料を収集した。1990年2月には、ハワイ島日系人の県人会のうちでも構成員の多い熊本県人会の追跡調査のため、移民送出母村の熊本県での調査を熊本市及び八代市で行なった。日系人社会のハワイにおける文化行動が、かなり送出母村での血縁・地縁の関係を基盤にし、それが1世だけでなく2～3世にもかなり伝承されていること、さらに、日系社会内部での様々な組織や交流範囲にも、かなり影響を及ぼしていること等がわかった。

1989年度の調査は、いわば予察的段階であり、ハワイ諸島全体のイメージと島嶼ごとの地域差を把握することに重点がおかれた。従来の移民研究の多くが、ハワイ諸島に関しても、日系人社会に偏りがちであったが、ハワイ諸島の中におけるエスニック・グループは、きわめて多様であると同時に、相互に交流あるいは疎外という、エスニック・グループ間の関係のあり方も、同じアジア系移民の場合でもかなり異なっている。こうしたいわば移民集団相互間の問題がハワイという島嶼社会でどのように発生し、どういう地域差を島嶼間でもっているのか、という点を分析する必要がある。今年度は、移民集団の相互関係のあり方や問題点、現状について、ハワイ諸島の島ごとの人種構成比率の違いに応じ、個別に検討したい。具体的には、オアフ島を中心に、予察

的調査の延長で議論していきたいと考えている。

「ハワイ・イメージの変化について」

森 田 三 郎 (文学部)

1989年の夏、書店で『ハワイマガジン』という雑誌を見つけた。副題は「2度目のハワイの人のための雑誌」である。奇跡の経済復興と円高メリットのおかげで多くの日本人が海外旅行に出かけるようになった。その最初の、そして第一の目的地がハワイであった。戦後の日本人にとって、ハワイは流行歌「あこがれのハワイ航路」に象徴されるようにロマンとあこがれの地であった。今や大量の日本人がワイキキ・ビーチやホノルルのダウン・タウンにあふれ、日本語だけしか知らなくてもハワイ観光が簡単に楽しめるようになった。

一方、パール・ハーバーの爆撃という不幸な結末をむかえるまでの、戦前における日本とハワイの関係は、契約労働者として渡航した日系移民を通して始まった。日本の雑誌に当時報道されるハワイ関連の記事も、堀口大学の「ハワイ旅行記(『新潮』)、巖谷小波の「ハワイ雑感・楽園苦誌(『太陽』)」などをわずかな例外として、ハワイの日系人の待遇のことや、ハワイのアメリカ併合に関するものなど、政治的な問題がテーマの大部分を占めていた。

日本人にとってのハワイのイメージは、戦前から戦後、そして高度経済成長期をへて今日へと大きく変化してきたのである。その変化の意味を探るために、ハワイ自身がどう変わってきたかを問うと同時に、ハワイをとりまく他の国々(とりわけ日本)がどう変わってきたか、そして両者の関係(とりわけ広い意味での日米関係)がどう変わってきたかについて、来年度は現地調査も含めて具体的に調べてみる予定である。

「ハワイ社会の経済的構造」

杉 村 芳 美 (経済学部)

このパートでは、ハワイ社会を典型的なサービス化社会とみてその経済的特質を分析するとともに、サービス化の進行が移民社会としての側面とどのようにかかわってきたかに関心を向ける。

ハワイ経済の中心をなすのは、かつてはプランテーションを軸とする農業であったが、今日では観光を軸にしたサービス産業と公共部門である。農業労働者の数は1930年にピークをむかえたあと一貫して減少し、1970年段階でピーク時の約1/5になり全

労働者数に占める比重も著しく低下した。逆に、非農業労働者の数は増大し、なかでもサービス部門(運輸・販売・金融はのぞく)と公共部門の拡大は著しく両部門の労働者数だけで非農業部門労働者数の41%をこす(1986年)にいたった。

半世紀のあいだに、ハワイ社会は農業経済からサービス経済への急激な産業構造・職業構造の変化を経験したわけであるが、その過程で移民社会も大きな構造変化をこうむってきた。この点を見るために、産業構造・職業構造の変化のもとでの移民諸層における世代をつうじる職業移動の実態について調べていくことにしたい。

そのうえで、ハワイ社会における職業意識・労働観のありようを探ってみたい。農業経済から急激にサービス経済化した観光社会、さまざまな経済文化を背負いまた世代間の落差の大きい移民社会、この二つのおおきな特徴をもつ社会における労働意識の変化の問題はきわめて興味深い。

「楽園の労働」がどのような労働物語をつくり上げてきたのか、他のパートの観点も参考にしながら、作業をすすめていきたい。

「ハワイの法文化

— “ハワイ法” とコモン・ローの相克

丸 田 隆 (法学部)

初年度の研究課題は、ハワイ諸島に「固有の」法の内容分析に重点を置いている。この固有法の特徴は、土地法、賃借法、相続法などに著しい特徴があり、マリノフスキーの説明にかかる、ニューギニア土地法との類似性もみせる。ハワイの近代化=アメリカ化は、まさに、この「固有法」が「アメリカ化」されることにかかっており、同時に、ハワイのハワイの特徴の法制度的消滅を意味する。しかし、制度的変化とは、必ずしも意識変化を意味せず、むしろ「古き良き善隣関係」を基盤とする法思想は、現代法行動のなかにも生きている。アメリカのコモン・ローは、そのような生きる法との調和を示しつつ、資本主義的構造改革をゆるやかに押し進めてきたといえる。

そこに、直接的なかたちで資本の論理=近代法の論理で、「合法であれば、金を払えば、何でもOK」という考えをもちこんできているのが、近時の日本企業である。

このような発想が、伝統的ハワイ人の意識と衝突しないはずはない。次年度からの研究対象は、この

方向に展開される予定である。

「ハワイの観光政策」

河 田 潤 一 (法学部)

ハワイ州は、今日ではアメリカ本土諸州に匹敵する生活水準を誇るまでに至ったが、経済基盤は、有力な地場産業を欠く不安定な構造に支えられていることに変わりはない。農業の他に観光業が主たる経済活動である。その観光業も、太平洋兩岸の景気状況に大きく左右される。とは言っても、年間数百万人に昇る観光客は、ハワイ州における年間総稼働仕事数の約3分の1を生みだすため、最重要産業であることに変わりはない。また観光客の大半を日本人が占めていることは、我が国にとっても無関心な問題ではいられない。

こうした問題関心から、河田は、ハワイの観光政策を取り上げようとする。具体的には次のような構成を取るであろう。

- (1) ハワイ州における観光統計項目の時系列的分析
- (2) ハワイ州にとっての観光業
- (3) ハワイ観光局
- (4) 観光政策をめぐる政治過程
- (5) ハワイにおける湯沢町の問題

人間の深層心理と社会の深層構造

本研究チームは、4月の研究員顔合わせに始まり、平成2年1月の公開講座を含めて、計9回の研究会をもち、いわば“深層文化論”を展開してきた。そして、表層・深層を含めた多層的な文化論へ論議は深まって来ている。

以下、哲学、経済学、文学、医学の各分野から、研究発表の要旨を報告する。

実体論をめぐる合理主義と非合理主義の諸問題

—「人間の深層心理と社会の深層構造」への序説—

(谷口文章・哲学)

近代合理主義は、ギリシャ以来絶対根拠を志向してきた。それは、実体論による真/偽、主観/客観、善/悪などという二項対立によって展開され、前者が正しく合理的であり、後者は誤りで非合理的であるとする。特にデカルトによる近代自我の確立は、現代に至るまで知の中心化をもたらし、合理的整合性の下に人間と社会を分析する表層理論を提供した。その結果、潤いある生を硬化させ、人間疎外の社会を創り出すことになった。

20世紀に入り、フロイトが非合理的な無意識の病理学を提示したが、それは合理的実体論から非合理的なものをも解明し得る構造的関係論への必然的移行を示唆した。したがって次の課題は、無意識の非合理性を臨床のレベルから「人間の深層心理」の論理へ、つまり知の脱中心化の試みに発展させ、さらに惰性化・硬直化した社会制度や文化の死角を明らかにする「社会の深層構造」の論理が攻究されねばならないであろう。

経済学における非合理的要因について

—一般均衡学説を中心に（試論）—

（永友育雄・経済学原論）

経済学にはいりこんでいる非合理的要因を、ここでは二つに分けて考えてみよう。第一に、経済の現実の中にはたくさんの非合理的要因が作動しているが、経済理論はしばしばそれを無視する。これを第一の非合理性と呼んでおこう。次に、研究者が無意識の中にもっている要因が、たとえば無意識の願望が研究の中に忍び込んで来て研究の内容に働きかけてくることもあるだろう。これを、第二の非合理性と呼んでおこう。この報告は、この二つの非合理的性を一般均衡学説の中で見てみようというわけである。

第一に非合理性は、主体均衡論の中に見ることができよう。

では、第二の非合理性はどうだろうか。ここで報告者は、80年余りの年月をついやして完成してきた一般均衡学説の背後には、一般均衡状態が現実を実現して欲しいという人間の願望がひかえているのではないかと推量する。これは、第二の非合理性とみることではできないだろうか。

ハーマン・メルヴィルの反合理主義精神

（谷本泰三・米文学）

知覚力の及ばぬ領域を目指すアメリカ文学の主流は、反合理主義精神に貫かれている。メルヴィルの『バートルビー』はその代表作である。ウォール・ストリート法律事務所書類をコピーする仕事に雇われているバートルビーの沈黙は、reasonとcommon senseを拠り所とする弁護士（語り手）の饒舌さが解明しえない深淵を暗示する。弁護士の敗北は経験論的実証主義の敗北である。この作品は、アメリカの合理主義的民主主義に暗影に投ずるとともに、理性では不可解である実在を無気味に暗示する。言語障害者バートルビーは、合理主義が入り込むことのできない霊的次元を体現するのだ。ここでは、言葉は真理に到達する手段とならない。言葉を放棄

した男は、語り手の空しい饒舌（これも一種の言語障害）の向こうに、無言の影となって現れるのである。『バートルビー』は、語らねばならないことを語る言葉を失った人間の有限性を見事に示した作品である。

異文化としての分裂病——症例を通して—

（杉林 稔・精神医学）

分裂病は、腹痛や発熱などのいわゆる身体疾患とは違い、器質的原因が未だ不明の病である。これは、分裂病者の生き方と不可分であるため、感染症などのように“分裂病”という異物に取り付かれていると考えるのではなく、生きた歴史の表現すなわち分裂病という事態を生きていると考えられる。

このような事態は、単に<狂気=非理性>ではなく、一定の秩序とまとまりを示している。その意味で、分裂病者を異端者として排除するのではなく、異文化に生きる者としてとらえ、共有の世界をもち、コミュニケーションは十分可能である。また、従来の病前性格として論じられてきた分裂気質をウェイ・オブ・ライフとしてとらえ直すとき、文化的少数者である分裂気質者が精神的失調を起こして分裂病という異文化を生きることとなり、その事例性は母体文化との軋轢の度合に応じた結果であることが理解される。

以上について、症例を通じて考察する。

人間学的精神医学における人間観

—V. E. フランクルのロゴセラピーをめぐって—

（小谷英子・医学概論）

人間学的精神医学に位置するロゴセラピー（実存分析）について、「Homo patiens（苦悩する存在）」の概念を中心に、その礎である人間観を考察する。

フランクルの人間観は、臨床や強制収容所体験での実感に根差しており、医学的な異常／正常、精神分裂的な意識／無意識ないしエスー元論をも超えている。なぜなら、人間は、病／健康あるいは限界状況／日常にかかわらず、真理や苦悩やよろこびを体感しているからである。つまり、“生の意味についての意志の自由性”を本来的に内在させている人間観がロゴセラピーの背景にあるため、因果律に従っていると考えられる心身の有機体の次元に加えて、彼は「精神 Geist」の次元を強調するのである。

Home patiens の概念には、このような彼の人間観が生きられるための理念として集約されていると考えられる。従って、これを健康という医学的価値において評価するとともに、“未完成の完成”であ

る生き方の方針として結論づけたい。

文学作品のイメージをめぐる

(寺島樵一・国文学)

文学作品に表されたイメージを考えると、伝統的なイメージ論のイメージの問題の捉え方は、表現という表層と、内容という深層の対立的な把握、という問題の設定が前提となっている。しかしながら近年の言語理論を援用した文学理論が扱っている、表現における表層と深層の問題は、このような伝統的なイメージの議論では片付かない問題の所在を明らかにしている。

日本の古典和歌において、その課題は多く「何を(どのような思想を)表現するか」ということよりも、「いかに表現するか」が優先してきた。しかし一方では、象徴主義の文学論の広まりにより、「何が表現されているか」を問う、いわば深層的な理解の仕方未だ広範に実践されている。表層的な解釈と深層的なそれとの間の問題を新古今時代の二つの歌を例にとり、両者のもつ問題をそれぞれ考える。

医療の神話

(中川米造・環境医学)

近代医学はその起源を16C半ばの法王庁の禁令を無視した解剖に求め、解剖学によって明らかとなった身体内部の異常や変化が病気の本体である、という神話を19Cに確立した。屍体解剖を起源とするこの考えは、病気は患者自身ではとらえられない体内にあるため、専門家としての医師に自身を委託すれば安心という神話をさらに生み出した。また、病気を診て病人を診ない医学や、神のような万能さをまとった医師と人権を剝奪されたアノニムな患者という医療関係もここに起因している。

近年の様々な調査からは、罹患率の推移が近代医学の発達に比例していないことや、医原病が指摘され、これまでの医療の神話は今や崩壊しつつある。

“病い”の主体になり得る私たちが、健康の重要なファクターである環境や行動に目を向け、医療に参加するならば、硬直化した神話は賦活化し、躍動する神話へ転化する。このとき“癒し”としての真の医療が新たに生まれるのではないだろうか。

ピューリタニズム・原始仏教・新新宗教

(藤本建夫・経済政策)

石油危機あたりから日本の若者たちの間で宗教がブームとなった。彼らは現代の豊かで合理化された社会のなかで生と死への言いようのない不安に捕えられている。M. ウェーバーはかつて『プロテスタ

ンティズム倫理』の末尾で近代化・合理化の果てに「精神なき専門人」の登場を予言し、また「中間考察」において宗教なき時代の生と死の無意味化に言及した。そして彼は『ヒンドゥー教と仏教』のなかで永久に流れる時間の超克に救済を求めた原始仏教の世界を分析したが、彼はそれを通して近代合理主義のもつ負の問題性を我々に伝えようとしたのではないか。

心とイメージ

本研究チームは、申請時の9名のメンバーに、平成元年度より本学に赴任した織田尚生、港道隆の両氏を加えて、計11名で共同研究を開始した。平成元年度には、以下のように6回の研究会を持ったが、何しろ、「心とイメージ」という研究テーマが、哲学・心理学・精神医学・神話学・美学・文学・言語学等々の多様な視点からアプローチすることのできる広大な領野を包括するだけに、共同研究初年度は、研究会における報告・討論によって、各研究員の研究の視点を模索・拡大することに重点が置かれた。

研究会の概要は以下の通りである。

第1回研究会

「現代の視覚的イメージ神は死んだか？」

(報告：斧谷彌守一)

かつてニーチェは、人間が「神を殺害した」、「神は死んだ」と書いた。だが、その後、果たして、人間は神を殺し切った、と言えるだろうか。デ・キリコの絵は木偶の坊としての現代の「形而上学者」を提示し、アルヌルフ・ライナーは黒く塗り込められた十字架を描き、アンゼラム・キーファーは船の破れ目からフリードリヒ的な崇高な自然を覗かせる。ジャックソン・ポロックのアクション・ペインティングにおける激しい内面の表出と、「表面」だけをコピーするアンディ・ウォーホルのポップ・アートとは、対極にあるように見えるが、そのような二人が共に、絵を描く際には一種の無意識状態にあることを認めている。電子顕微鏡下のミクロの世界の光景と、抽象絵画の世界の光景が、奇妙な一致を示す、という奇妙な事実も存在する。「謎」としての芸術は、現代にあっても、非合理性と合理性との葛藤を表出しているのである。

第2回「複数太陽神話と心の危機」

(報告：織田尚生)

精神科医は、言語的に理解し合えない分裂病患者

に自由画を描いてもらって、患者とのコミュニケーションを図ることがある。すると、患者の快復過程に伴って、一定の普遍的なイメージのパターンが現われてくる。例えば、ある患者は、初め6個の太陽を描いていたが、明るい太陽と暗い太陽という2つの太陽の中間段階を経て、遂には、明るい1つの太陽に辿り着いた。複数太陽神話は、東南アジア、南北アメリカ等々にも見られるものだが、中国では、『淮南子(えなんじ)』に9個の太陽についての、『山海経(せんがいきょう)』に6個の太陽についての記述がある。この分裂病患者の場合、6個の太陽という、世界が規則性を喪失していた段階から、余計な太陽が死んで1個の太陽が再生される段階へと到達する過程が、患者自身の内的世界の崩壊からその再構築へと至る過程を表わしており、そこには、患者自身の自己快復力が発現している、と言えるのである。

第3回

「イメージ解読の方法論—イコノロジーによる実践—」

(報告：若桑みどり [千葉大学])

「イコノロジー」は、20世紀の初頭にワールブルクによって開拓された、イメージ解読の方法論である。1490年代から印象派までの正統的なイメージ表現は、同時代のエクリチュールとの関連でしか読み解くことができない。ヴィジュアル・アートといえども、単に感覚によって描かれたのではないのであり、そこには、不可視の観念を可視的イメージへ転換するための具体的な方法が介在していた。この方法を可視的イメージから不可視の観念へと逆探知するのが、「イコノロジー」なのである。(1490年以前のイメージ表現の場合は、キリスト教の何をどう表わすかが、ビザンティン以来の慣習によって確立されていた。この慣習的表現をアイデンティファイするのが、「イコノグラフィ—(図像学)」であり、「イコノロジー」とは異なる。)例えば、ボッティチェリの「プリマヴェーラ」も、右から左へ向かって、観念の世界のアレゴリーを展開している、等々。

第4回

「若桑みどり著『薔薇のイコノロジー』を読む」

(報告：上村くにこ)

先ず、ミケランジェロとレオナルドのレダに関する報告を受けた後、イメージの普遍学の可能性、コードからはみ出すもの、多義性、印象派以降の芸術などの問題をめぐって活発な討論を行なった。

第5回「いま、コンクリート・ポエジーは？」

(報告：上村弘雄 [九州大学])

言葉をコミュニケーションの手段として見るとき、コード解読ができればそれで充分なのであり、音声や文字そのもののことは気にされることがない。コンクリート・ポエジー(具体詩)は、メタファーとしての詩を拒否し、意味の伝達以前の言葉の素材そのもの(音声・文字)に関心を払って詩を作る。具体詩は、1950年代初頭に、スイスのゴムリンガーによって始められたものだが、その先駆現象としては、マラルメ/アポリネールの形態詩、ダダイズム、未来派、マックス・ビルル具体芸術などがある。ゴムリンガーは、行分けて表現したポエジーを排して、ページをグラフィック・スペースへ変貌させようとした。ブラジルでは、ノイグンドレスというグループがアイデアグラム(表意文字)を目指す試みを始めたし、日本でも、北園克衛のパウ・グループと、新国誠一のASAグループが、造形詩、象形詩、象音詩ともいべき詩を作っている。

第6回

「オペレーター—位置—イメージの経済学—」

(報告：松浦寿夫 [東京外国語大学])

世界と、世界のイメージという2つの項は、対称的ではあり得ない。対称性の崩れる位置が、オペレーターの位置である。20世紀芸術においては、オペレーターが重要な位置を占めている。ブレヒトの演劇は、現実のように舞台上の劇を見ている観客に対して、実はその劇が作者・演出家というオペレーターの作意によって構成されていることを露呈させるようにできている。ピランデルロの『作者を捜す六人の登場人物』では、登場人物たちは、作者というオペレーターがいなければ、自分たちに与えられたアイデンティティから逃れることができない。フォトグラフィのオートマティズムにおいては、あたかも人為を介さないかのごとくに像が出現するが、実はそこには、シャッターを押すオペレーターが介在している。「開かれた作品」(エーコ)も、ある回路のもとに開かれていることを見えなくさせるという危険を孕んでいる。果たして、オペレーターの位置を抹消できるイメージ論はあり得るのだろうか。

(文責：斧谷彌守一)

環境と文化

人類の文化は様々な環境条件に支配されて形成され発展し又環境条件の変動に伴って変化してきた

様相を各分野の側面から考察し、討論を積み重ねて総合的にまとめ上げることを目標において出発した。1989年4月28日(金)に全員が集って、それぞれの当面の研究計画を示し、中間報告の研究会開催の日程について相談した。以下に各研究分担者の報告の概要を述べる。

第1回研究会(1989. 5.25)気候と人類活動

報告者 藤田 晃

地球上各地の気候条件・自然条件とその地域の民族の文化の特徴、特に自然観・自然科学思想の特徴について調べてみたいとの立場から報告がなされた。どこでも入手できる資料として、丸善理科年表にある気温、降水量の統計資料のプリントを配布し、ヨーロッパ、アメリカ、アラビア、ペルシア、インドの主要都市の気候条件の日本との相異とその特徴について考察した。気温の比較では特に顕著な差異はないが、降水量では差があり我国は欧米の2倍か3倍の降水がある。地表水が豊富で湿度が高い、この条件が我国の農業・産業を特徴づけている。

第2回研究会(1989. 6.15)水自然と文化

報告者 日下 譲

報告者の今までの六甲山周辺の水・地下水の調査・研究に基いて、水質の問題が論ぜられた。一般に良い水悪い水と言われている水の化学的側面についての説明があり、国内各地の水から更に世界各地の水についてその溶存イオンの種類・濃度・割合が示された。このなかでも重炭酸カルシウムCa(HCO₃)₂が大きな意味をもつことが指摘された。水の豊富な地域と水の少ない地域では自然環境特に植物環境が相異し、そこに生活する人間の自然観も相異してくる。乾燥地帯の文化と湿潤地帯の文化にはおのずから差異がみられ、その歴史も明らかに異った流れがみられる。

第3回研究会(1989. 7.13)

環境観の進化史(人類文化の容器としての気候帯・気候区分)

報告者 藤岡 喜愛

予定されていた課題「環境観の進化史」よりも、第1回と第2回の報告の延長として人類文化の容器としての気候帯・気候区分を主とした報告をしたいと申出た。福井英一郎編「地理学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ(旧版)の中のⅤ生物地理P235~P313、桑原武夫編「素顔のヨーロッパ」1978朝日選書No122、「環境と文化—人類学的考察」1978日本放送出版協会、その他文献資料のコピーを基にして、古典的なケッペン

区分図の不十分な点矛盾点を指摘し吉良竜夫の生態気候区分図の長所正確さについて説明した。

ケッペンの乾湿指数 $=1.07^{-1} \times P - t$ = 月平均気温, P = 月降水量 世界各地の植物生態、生活形態、風景のスライドを示して説明し、雑草に対する考え方の民族による相異、有畜農業と無畜農業との相異が論じられた。

第4回研究会(1989.10.19)植物環境と生活

報告者 田中 修

14枚のプリント(データと論説)を基に植物環境について報告された。社会の進歩に伴って環境破壊が進行し植物環境の悪化が一般に憂慮されるようになった。熱帯林の減少と砂バク化、水管理の不備による塩害などが広く報道されるようになり一部に森林化社会、脱都市社会への指向も見られるようになった。

植物のもつ様々の機能についてプリントのデータを示しながら説明され、学校の校庭にみられる樹種の調査結果、箕面、北摂の社寺林の樹種とヒン度の意味するところが説明された。身近に存在している樹種が一般にほとんど知られていないし、その種類が生活において何かが全く知られていない。農業技術の進歩は農産物の生産性を著るしく増大させたが、農産品の地域性と季節性が失なわれ、郷土食が滅亡したようだ。

一方において今まで役に立たなかった植物の有効性が注目されている。農産物のハイブリッド化は有効な形質を集めて今までにない種類を作りだし、これは一代限りというものである。この種のもは企業的に有利性が大きい。このようなバイオテクノロジーの発達はかくされた植物の形質を保存する為に現在役に立たない植物種の見直しと保存の努力を必要ならしめている。

森林保護の問題、植物資源保護の問題など、各々の立場から討論意見交換された。

第5回研究会(1989.11.16)

北アメリカ原住民の環境観

報告者 久武 哲也

北アメリカ原住民特にNavajo族の自然観環境観について18枚のプリントに基づき報告された。又、藤岡より「割り箸」に関する論説のプリントが配布された。割り箸は決して森林破壊の元凶ではないという主旨のものである。

Navajo族の生活と民族の特徴である砂絵を中心にしてナバホの自然観環境観世界観についての考察

が論じられた。原住民は現在約142万、1970年には72万であったから10年で約2倍に増えている。このうち Reservation に住むものが約半数で十数カ所の居留地に分かれていて久武はこれらを訪れたことがあった。大きなもので5.3平方軒、全部で約20万平方軒大部分は西海岸地帯、南西部ユタ、コロラドにもある。El Huerfano peak を世界の中心と考えている。Jurassic の Navajo sandstone layer の砂を採取して砂絵を画く風習がある。この砂絵にナバホの思想が表現されている。ナバホは自然と人間の身体を対応させて考え、大地を自分の身体そのものと見ています。ナバホの聖地に存在する山々は人間の臓器に対応され砂絵で表現されている。1960年以降この地域の開発が進み、地下資源が豊富であることが明らかになった。石炭・石油・ウランなどの莫大な埋蔵量が期待され採掘が進んでいる。ナバホにとって地面を切り開くことは人の皮膚を切り裂くことにひとしく現地人と鉱山会社との間に多くの摩擦があった。鉱業に従事する現地人は決して採掘には従事しないで運搬などの周辺の仕事に就いている。地中にあるものは未成熟のもの胎児のようなものとみられ決して無理にとり出すべきでない、地表に現れた成熟したものだけ採取してよいと考えている。

第6回研究会 (1989.12.14) 乾燥地帯の歴史と文化 報告者 堀 直

降水量よりも蒸発量の方が多い地域を乾燥地帯という。ここに住む人々が水と自然をどう見ているかそしてどのような文化があるかを考察する。13枚のプリントが用意された。

一般に年雨量200mm以下の地域は砂漠になる。地下構造によって地下水が湧出して泉になる所がある一方地表水が地中に吸収されて wadi 尻無川になる所もある。4000m以上の高地では氷河になり、氷ど

け水が地表を流れ降水量ゼロ地域に川が流れる所もある。乾燥地帯で恒常的に淡水が得られる所を Oasis と地理学上では言う。Oasis は人工的なものが多く、人工の河川からの導水によって小麦その他植物を栽培しているが年雨量200mmが限界である。天水農業は年雨量が500mm以上でないとなし成立しない。タリム河をへてロプ・ノルにそそぐヤルカンド河の流域には幾重にも水路・アルクが拡がりそれが枝分かれして葉脈のようになりまたもとの河につながっている。このような地域は灌漑に頼っているので大雨は反って良くないこともある。カレーズ・カナートと呼ばれる井戸と地下水路が灌漑に使われている。これはペルシアでは BC 8 C から記録がある。奈良のお水とりはこのカナート信仰の影響かと言われている。カナートの最大のものは長さ80km深さ80mの井戸のものがある。Teheran は4本の Oasis で維持されていた。乾燥地帯の北側には草原地帯ステップがあって牧畜遊牧が行われ、羊馬牛犬ラクダと、山羊が飼われている。遊牧には水平移動と垂直移動があって、夏には高緯度又は高地に冬には低緯度又は低地に移動するので春と秋に大きな移動がある。

中央アジアは東からシナ文明西からはオリエント(ペルシャ・トルコ)南からはインドの文明の影響を受けて発展し、一時は大遊牧帝国を形成した。交易路で各地の Oasis を結び契約により支配圏を拡大することができたが内部矛盾を生じると簡単に崩壊した。ヨーロッパで近代工業と交通が発達すると対抗できなくなって18Cには後進国に転落した。遊牧民族は単純な生活様式で文化程度が低いように考えられているが、本来人間が生活できないような所に智恵と技術をこらして住みついているその知識と伝統は私達にはない高度の文化があると言える。

(文責 藤田 晃)

平成2年度研究課題および研究チーム

< 研究所委員会企画もの >

平生鈺三郎の人と思想

●研究内容の概要

平生鈺三郎研究は、第Ⅰ期が「平生鈺三郎の日記に関する基礎的研究」、第Ⅱ期が「平生鈺三郎の総合的研究」、第Ⅲ期が「平生鈺三郎とその時代」であった。これらⅠ、Ⅱ、Ⅲ期の研究を通じて、平生の日本近代史上の位置付けがかなり明確になってきた。そこで、今回は、そうした平生の日本近代思想史上の役割、三菱や三井等、平生が何等かの形で関与した財閥に対する平生の見解、これまでの平生研究の空白であった、平生の女性論、

それと関係する平生夫人の平生観や夫婦観、また、平生が住んだ神戸に対する平生の思い、さらには、平生の良きライバルであった各務謙吉と平生との経営理念の比較学の研究をⅠ～Ⅲ期の平生研究の諸成果を踏まえて行ないたい。

●研究の特色

平生鈺三郎の日記、同夫人の日記、さらには平生が求めに応じて執筆したエッセイ等を踏まえ、平生と比較しうる経営者、教育者、思想者等をも取り上げ、平生の歴史的、同時代的、位置付けを、より一層明確にすることを本研究の特色としたい。

●総合研究として研究することの必要性

平生鈺三郎について、これまでの研究成果でも明らかであるように、平生は実業家としては余りに教育者であり、思想家であったし、教育者としては余りに実業家であった等、一筋縄では把握できない人物であった。従って、専門を異にする研究者の協力が必要不可欠であり、学際的研究が要求されるのである。

●研究チームと研究の分担

三島 康雄 (経営)	平生鈺三郎の各財閥論
高阪 薫 (文)	平生鈺三郎の女性論
松尾 恒子 (文)	平生すゝ夫人の日記と鈺三郎
安西 敏三 (法)	平生鈺三郎の思想的位相
杉原 四郎 (名誉教授)	平生鈺三郎と神戸
柴 孝夫 (京都産業大学)	平生鈺三郎と各務謙吉の経営理念

<公募によるもの>

都市と文学

●研究内容の概要

「苦悩の神の偉大なる象徴」(ジョン・ドライデン)とか「ロンドンにあきた人間は人生にあきた人間である」(サミュエル・ジョンソン)といったことばで言及された都市空間と文学とのかかわりは近年大きな注目を集めていて、1990年代に生きるイギリス文学・アメリカ文学の研究者もトポグラフィを避けて研究を続行することはできなくなっている。それは文学作品における都市像のかもしれないテンションが人間存在の基本にかかわる重要な課題となっているためであるが、松村昌家が翻訳した『近代文学と都市』(バートン・バイク著、研究社出版、1987)、中島俊郎が専攻するジェイムズ・ジョイスにおけるダブリン、青山義孝が専攻するナサニエル・ホーソンの「舗道の孤独感としての都市観」、大森義彦がアメリカ留学で知り合った現代アメリカ作家と都市とのかかわり、渡邊孔二が専攻する18世紀イギリス作家とロンドンが、それぞれ個別でありながら、決して無関係ではないことから明らかである。

確かに、都市はバイクが言うように「西洋文明の歴史を通じて修辭的トポスとして用いられてきた」のであって、バベル、バビロンにまで遡るであろうが、都市が人間認識とのかかわりから文学に深くかかわってきたのは特に18世紀からであって、われわれは主に、18世紀から20世紀までのイギリス文学、アメリカ文学と、創造、誇り、腐敗、墮落、破滅、罪、荒野、孤独、不安、恐怖、生、死など様々なイメージと結びつく都市とのかかわりを各研究員の専門分野から持ち出される問題として多角的に検討しながら、研究成果を公表したいと考えている。

●研究の特色

- ① イギリス文学・アメリカ文学における18世紀から20世紀にわたる都市像の移行を各研究員の専門分野から照射することによって、それぞれの国、時代における都市像の類似と相違が明確にできること。
- ② 膨大な文献資料の的確な選択が各研究員の協力で可能になること。
- ③ 研究員全員による討議検討を経て、各研究員の研究がより明確になること。

●総合研究として研究することの必要性

都市と文学とのかかわりを研究する場合、研究員個人の専門領域内での研究だけでは不十分であり、各研究

員の研究が相互補完的役割を有することがどうしても必要であって、研究対象の性質上、学際的総合研究を行なってはじめて実りある成果が期待できる。

●研究チームと研究の分担

青山 義孝（文） 19世紀アメリカ文学における都市
大森 義彦（文） 20世紀アメリカ文学における都市
中島 俊郎（文） 20世紀イギリス文学における都市
松村 昌家（文） 19世紀イギリス文学における都市
渡邊 孔二（文） 18世紀イギリス文学における都市

生命の概念に関する研究

●研究内容の概要

“生命”なる語は広く、そして深く人類社会に浸透し、多用されてきた。近年はまた、この語は自然科学界のみならず文学界、法学界、宗教界等において繁用され、その概念はそれぞれの学問分野に於いて確立されている。そのために生命の定義はさまざまに拡大解釈され、その内容は相互に大きく異なるものとなってきている。

本研究では、生命科学分野では分子生物学および生態学の立場から、また法学、特に刑法の立場から、さらに哲学の立場から、生命の概念を論じあい、歴史のおよび現代的に調査する。そして生命の概念の相違を明確にして、今後の生命論の発展に寄与することを研究目的としている。

●研究の特色

本研究の研究幹事は、30数年間にわたって生命研究に従事し、多くの著書・論文において生命を論じてきた。その間において、最も痛感したことの一つは、関係分野においてさえも生命の概念および定義が大きく異なることである。したがって、学界においての専門的生命論は互いにかみあわず、学問発展における大きな無駄と障害をつくっている。

それにもかかわらず、この問題を総合的に取り組み、論議しあった研究はまったくないのが現状である。

●総合研究として研究することの必要性

“研究の特色”欄にも示した通り、生命の概念の学問分野による相異点を歴史的ならびに現代的に明確にし、論議することを目的とする研究であるから、異分野の研究者による総合研究は必須条件である。

生命科学、法学、および哲学の分野からどのような生命概念が総括されるかは極めて興味のあるところであり、その成果の公表は関係分野の研究に大きく貢献できるものと信じている。

●研究チームと研究の分担

中村 運（理） 分子レベル研究に基づく生命概念
斉藤 豊治（法） 法学研究における生命概念
田中 修（理） 生態レベル研究に基づく生命概念
谷口 文章（文） 哲学研究における生命概念

神戸と華僑

●研究内容の概要

平成元年度より開講の総合科目「神戸っ子のこうべ考」の中の一つの主要テーマである「神戸と華僑」をより深く掘りさげて研究する。「華僑」についての研究は広くなされているが、甲南大学の街、神戸と華僑についての研究はあまり見あたらない。甲南大学には毎年神戸に住む華僑の子弟が数多く在籍している。また神戸に住む中国人留学生の数も増え続け、中国が神戸の今日の問題として浮び上がって来ている。

ここで「神戸と華僑」の研究は、意義大なるものと考ええる。

●研究の特色

「神戸と華僑」を単なる文献研究のみではなく、神戸の第一線で活躍する華僑をも研究員に迎え、その実際

を深く掘りさげると共に、その研究を華僑の出身地、中国（台湾、香港、福建省）にまで広げ、新世代の華僑とも呼べる中国人留学生、修学生の問題に言及する。

●総合研究として研究することの必要性

「神戸と華僑」といった国際性のあるテーマを実際面から研究するためには国際的研究チームを組むことが必要であり、総合研究として研究することが必要である。

●研究チームと研究の分担

辻田 忠弘（理） 華僑の出身地 福建省、香港
高寄 昇三（経済） 神戸市政と華僑
松井 明太（理） 華僑の出身地 台湾
南 豊太郎（理 非常勤） 華僑総論
角田 嘉宏（理 非常勤） 神戸の華僑企業論
尤 昭福（福大実業株式会社社長）神戸の華僑生活・文化論

女性と社会

●研究内容の概要

今まで女性問題は、女性だけに個有な、そしてマイナーな問題として取り扱われてきた。しかしいま、あらゆる学問の分野で、女性が社会の中でどんな立場にいたか、どんな役割を果たしてきたか、どんな女性イメージが、どのように作られてきたかが注目されるようになった。女性を研究することが、とりもなおさず、文化全体をさぐる新しい可能性となるということが公認されるようになった。

このような展望のもとで、本学の女性研究者が、各自の研究の中で抽出されてくる女性に関するテーマを持ち寄り、検討しあうことによって、各自の研究の奥行を深め、新しい活気を吹きこもうとするものである。

●研究の特色

この研究会はすぐれて学際的である。あらゆる分野にわたる研究の中に、女性の問題はひっそりと内蔵されていた。それがいま、激しいいきおいで表層に表われてきたのである。哲学・人類学・社会学・心理学・文学・体育学・法学・自然科学など、あらゆる科学の研究者たちの知を集め、総合的に女性の問題にアプローチする。

●総合研究として研究することの必要性

この研究会は1989～1990年に行なった「女性と人生」研究会の発展的継承である。2年間の活発な活動のおかげで、私たちはこの共同研究が、まだまだ尽きることのない研究テーマを生み出す可能性があること、さらに興味深い研究成果もあげられるという確信を得た。女性研究者のグループにとどまらず、ひろく男性研究者をまきこむような力をつけてゆくことが今後の課題である。

●研究チームと研究の分担

松尾 恒子（文） 心理学と女性
宮城 公子（文） 日本史と女性
斉藤 朋子（文） 中世の女性
上村くにこ（文） 文学と女性のイメージ
石川・フランケ・サスキア（文） ヨーロッパの女性
上水流伸子（体） スポーツと女性
松尾 洋子（体） スポーツと女性
千栄子・ムルハーン（イリノイセンター）日本文学と西洋
山田 純子（法） 法学と女性
萩野 美穂（文） 歴史と女性
饗庭千代子（文） ヨーロッパ文学と女性
番匠 明美（学生相談室）心理学と女性
高石 恭子（学生相談室）心理学と女性